

# 『ごもくめし』の留学生誘致のための効果的な広報戦略ツールとしての可能性

Preliminary studies on *Gomokumeshi's* potential as a tool for strategic public relations to attract international students

伊藤 みちる<sup>1</sup>, 趙 方任<sup>1</sup>  
Michiru Ito<sup>1</sup> and Hoan Tokuizumi<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学国際センター  
<sup>1</sup>International Center, Otsuma Women's University

キーワード : 『ごもくめし』, 大妻, 留学生  
Key words : *Gomokumeshi*, Otsuma, International students

## 1. 研究目的

本研究は大妻女子大学創設者である大妻コタカ先生の著作『ごもくめし』を利用した本学の留学生受け入れ事業に係る内外での広報効果の可能性を探るものである。本学国際センターは設立以来、韓国・中国・米国より留学生を受け入れて来た。一方で、本学の留学生受け入れ事業に関する方針は変動を続け、持続可能性を保ち発展しているとは言い難い。さらに本学への留学生がどのように本学に価値を見出しているのか記録したものは散見の限り本研究代表者の先行研究<sup>1</sup>以外には存在しない。

そこで、大妻コタカ先生について、本学の歴史、日本の女子教育において本学が果たしてきた役割等について紹介する『ごもくめし』を留学生対象の購読教材として、また内外への広報ツールとして活用することに着目した。具体的には、日本語・英語・中国語版『ごもくめし』の出版を行い、内外本学留学関係者の本学への理解・関心に関し、購読後の反応を分析する。さらに留学生の本学の評価や、そこから抽出できる改善すべき点などを記録し、留学生受け入れ事業に役立てることができないか、その可能性を探ることを目的とした。

## 2. 研究実施内容

平成 27 年に設立された本学国際センターは、平成 29 年度現在、韓国・中国・米国より合計 29 名の留学生を受け入れてきた。その受け入れ人数に大きな変化はないものの、平成 27 年度は 14 名、平成 28 年度は 11 名とやや減少方向にあり、平成 29

年度は 4 名であった。平成 30 年度もさらなる減少が予想される。

本学が積極的な留学生誘致活動を行っていない昨今、留学生出身国や大学において、実質的に対面や SNS・ブログなどを用い本学の非公式な広報活動を行っているのは留学生である。よってすでに本学へ留学をしている国外からの学生に対して本学の歴史や教育理念などに関する知識を提供し、本学へ好意的な感情を持ってもらうことが広報活動として効果的だと考えた。

先述の本研究代表者の先行研究によると、本学への留学生は、複数の留学先選択肢から本学を選択した理由として、日本の首都東京の中心に位置する大学であることを第一に挙げた。しかし本学の歴史や教育理念に共感して本学に留学した者は皆無であった。

上記から、本学の留学生受け入れ事業の今後を考える際に、本学の留学先としてのマーケティングやブランディング方法を模索する予備調査の前段階として、交換留学提携校の担当者や留学希望者へ学祖や学院の歴史を『ごもくめし』を通じて紹介することで、本学への関心や評価を高めてもらうことができるのではないかと考えた。

本学国際センター所属の韓国と中国からの留学生は日本語能力試験 N1 程度の日本語能力を持つ。日本語能力試験 N1 程度とは、日本の高校生以上の語彙・国語力を持ち、大学への正規留学が可能なレベルである。そのため本研究代表者は、日本語での『ごもくめし』の講読も可能となる日本語

の語彙と講読能力を持っていると判断した。彼女たちが『ごもくめし』を講読した際の反応は以下のとおりである。

『ごもくめし』講読前に留学生へ聞き取りを行った日本の女性のイメージは、日・中・韓の東アジア3カ国の中で最も社会的地位が低く、結婚して子どもを産むことを要求され、結婚すると社会で働くことが許されないため、経済的にも精神的にも自立できない哀愁な存在という惨憺たるものであった。そのような留学生が現代の随筆・自伝作品として、『ごもくめし』を講読した。留学生たちは日本の近・現代史の学習経験がなく、それに関連した知識も限られていたため、本研究代表者が日本の近・現代史や社会背景、文化や慣習などを説明しながら講読を進めた。

『ごもくめし』の講読中、数章においては、感情移入が高まり、泣き出す留学生が数名出た。特に「よい妻に」の章では、日本女性に対する上記先入観を持つ履修者が多かったからか、講読前に章名だけに反応し「結婚後は働くなと言っているのか」と紛糾した。他方で、農家出身で苦労をしながら大妻女子大学を創設した大妻コタカ先生の功績には感動していたようであった。

『ごもくめし』の講読を終えると、留学生たちは、本学への留学前に母国で無意識に築いていたようである自らが持つ日本・日本人へのイメージや知識は偏見・先入観であったことに気づき、特に日本人女性にも様々な生き方が存在することへの理解を深めたようであった。さらには自らの先入観として知っていたつもりであった日本人女性とはまったく異なる生き方をした大妻コタカ先生が創設した大妻女子大学で留学生活を送ることを非常に好意的に受け止めていることが分かった。つまり『ごもくめし』の講読を通じて、大妻コタカ先生の一人の女性としての生き方や教育理念に共感して、本学への留学に特別な価値を見出す者が少なくなかった。

このような留学生との経験から、『ごもくめし』は本学の広報資料として十分な価値を持つものとの認識を持った。現在は、現代日本語版と中国語版の印刷原稿の準備はすでにできている。しかし本研究の予算では3種類の冊子の製作ができない

ことが判明した。そのため、2018年は大妻女子大学創立110周年であるため、より幅広く国内外の関係者に配布が可能となる英語版の『ごもくめし』を製作することにした。原作の『ごもくめし』の英語訳は、本研究代表者を含め、7名の大妻中学・高校及び（もしくは）大妻女子大学の卒業生が英訳を担当した。英語版や中国語版の『ごもくめし』に対する反応は、次年度以降の研究テーマとした。

### 3. まとめと今後の課題

本研究では、『ごもくめし』講読が本学留学中の留学生や本学を留学先の選択肢の一つとして考える学生などが、本学への関心・理解を深め、評価を高めるきっかけとなる可能性に着目した。

留学生の反応から判断する限り、貴族や富豪ではなく、貧しい農家出身の学祖が夫の死や公職追放などの苦境に負けずに本学を建てた事実は、感動を呼ぶものであるようである。さらに大部分が韓国・中国出身である本学の留学生は、両国とも歴史のある大学を好み、本学も歴史ある女子大学として評価されているという。そのため本学の歴史や教育理念を詳しく紹介した『ごもくめし』は、今後とも格好の広報ツールとなり得るであろう。

今後は英語版の『ごもくめし』の増刷、現代日本語版と中国語版の冊子での出版を引き続き行っていきたい。さらに本研究で明らかになった点を踏まえ、東京都内をはじめ首都圏や日本全国に存在する女子大学と差異を図り、女子大学としての魅力を最大限に生かして女子留学生を引き付ける存在となる可能性に関し、引き続き探究していきたい。

### 4. この助成による発表論文等

#### 【図書】

Kotaka Otsuma 2018. *Gomokumeshi* (M. Ito, Trans.). Tokyo, Japan: Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University. (印刷中)

#### 【論文】

1 伊藤みちる『『ごもくめし』と留学生』人間生活文化研究 27. 2017: pp.645-653